

第36号
Vol.12-3
2016年1月1日

Dari Kuching

アジア地域福祉と交流の会(Asia Community Service & Exchange)広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人嬉泉内

TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 204, 2nd floor, Methodist Apartment, No. 17, Hose Lane, 96000 Sibu, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 Tel.Fax: +60-84-31-0757 E-mail: info@ace-jps.com : gkenkn@gmail.com



「ムヒバ」の池に続く道に群生するうつぼかずら

撮影者 中澤 健

ボルネオは年中緑がいっぱい。容赦ない灼熱の乾季も、雷鳴轟く激しい雨季にも。私たちの「ムヒバ」も、瑞々しい木々、花々、様々な昆虫、不思議な鳴き声の鳥たち…。自然のいのちが溢れる。青木ヶ原は、昔、富士山の噴火で流れた溶岩の上に出来た大樹海。いのちには決定的に過酷な条件の中で森が育ち、可憐な花も小動物も息づいているという。何という地球のいのちの豊かさ、逞しさ！

日本の小惑星探査機「はやぶさ2」は今、宇宙の果てに向かっていく。金星探査機が奇跡的に失敗を跳ね返して金星軌道に入ったのはこの間のことだ。宇宙技術の進歩はめざましいが、いくら探しても「いのち」には巡り会えない。ボルネオの夜空を飾る満天の星は素晴らしいが、どの星にも「いのち」のかけらさえ見つからない。それ程この地球は特別の星、宇宙にただ一つの星なのだろうか。

地球上に様々ないのちが生まれ懸命に生き次世代に繋いでいる。だが、いのちは当たり前と、人は王者の如く振る舞ってはいないだろうか。それだけでなく、互いにいのちを奪い合い、欲張り続け、自然や生態系、オゾン層の破壊、原発廃棄物…。もう、この星を壊すのは止そう。かけがえのない地球と其処に生きるいのちのために人間は「想像力と自制心」を取り戻す時ではないだろうか。(健)

博士号取得まで

古岡 ラリサ
(クアラルンプール 在住)

モスクワ大学でインドネシア文学を専攻していた際に国費留学を得てKLにあるマラヤ大学に交換留学生として学ぶ機会を得ました。偶然にも同じ時期に、マラヤ大学で経済学を学んでいたフミタカと出会い、モスクワ大学で修士号を取得した後、結婚しました。フミタカはその後、ベナンに仕事が見つかったので二人でKLからベナンに引っ越ししました。ベナンでは、中澤先生を中心に、日本人の友人も多く、住み心地の良い場所でしたが、フミタカがクチンにあるサラワク大学で経済学、また自分もロシア語を教える事になり、ベナンからクチンに移動しました。

クチンは、東マレーシアのボルネオ島に位置しているため、マレー半島からは距離が離れており、若干心配でしたが、その頃、フミタカがベナンでお世話になっていた大石先生がサラワク大学で教鞭を取られており、大石先生にいろいろ教わりながら、ボルネオ島に慣れていった事を覚えています。そして、大学でロシア語を教える一方で、江川さんなどの新しい友人もでき、やっとクチンでの生活も充実し始めてきた頃、またもフミタカがKKにあるサバ大学に転勤する事になり、中澤先生ご夫妻がクチンに来られる直前に、クチンを離れる事になりました。

サバ大学があるKKと呼ばれる海沿いの町と、サラワク大学がある川沿いの町であるクチンは、ボルネオ島の二大都市として良く知られていますが、住んでみるとかなり違いがあり、最初は慣れるまでに時間がかかり、平和で住み慣れたクチンを離れた事を「後悔」するような気持ちになる事もありましたが、これも中澤先生を通じて安部さん、加藤さんなどの友人を

紹介して頂き、KKでの生活に慣れることが出来ました。

サバ大学でもロシア語を教えており、非常に充実した毎日をおくっていました。大学で教員を続ける上では、やはり「博士号」を持っていた方が良いのではと思う事もありましたが、忙しい毎日の中で、なかなか決心が出来ませんでした。そんな折、学生の頃から、自分の将来に関して、決して余分な口をはさまず、自分のやりたい事をやらせてくれていた母親から「やっぱり博士号を持っていた方が良いよ」との激励を受けました。母親には、ロシアを学生時代に離れてから「親孝行」も十分には出来ておらず「定職」につかず転職をくりかえすフミタカについてマレーシア各地を転々として心配をかけてきましたので、親孝行のかわりに「博士号」をとって母親を安心させようと決めました。そのためKLにあるマラヤ大学の博士課程に登録しました。マラヤ大学は非常に国際化が進んでいる大学であり、同級生は、中国、イラン、サウジ・アラビア、スーダン、シリアなどの留学生が多く、文化、宗教、風習も違う学生が、マラヤ大学という一つの屋根の下で連帯感を持ち、切磋琢磨している事に非常に良い刺激を受けました。

このような恵まれた環境の下、自分も博士論文の執筆に日夜励み結果として2年半で博士号を取得する事ができました。

先月、博士号を取得後、マレーシアの言語教育の大家である指導教官から、どうしてもマラヤ大学

に残って研究を続けてもらいたいとの激励をうけ、マラヤ大学の言語学部の教員のポストに申請する事に決めました。

指導教官は現在、マレーシア文部省に委託されて国の新しい言語政策である「言語教育指導要領」を作成しております。近い将来、この新しい「指導要領」が発表された後、その知的な拠点としてマラヤ大学の言語学部の重要性が高まる事が期待されており、同学部の教員として、マレーシアの「言語教育」の振興にかかわれる可能



モスクワにて、母と一緒に

性が出来たことを感謝しております。では、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

(日本語訳：古岡 文貴)

☆☆☆☆☆☆

古岡文貴さん、ラリサさんご夫妻に初めて会ったのは、私がベナンに着いて約3か月後、1993年7月でした。以来ご夫妻にはどれほど世話になったかわかりません。ベナンの総領事館に勤務しながら研究者の道を歩き始めていた彼と優しく彼を支える奥様。モスクワから来られたラリサさんのお母様も一緒に村の結婚式に参加したこともありました。この度、ラリサさんが博士号を取得された機会に原稿をお書きいただき、とても嬉しいです。お二人のこれからの人生に幸多かれと、心から祈ります。(中澤 健)

異文化を楽しみつつ“食の研究”

山内 恒景
レストラン経営
(クチン & シブ 在住)

シブで約3年弱、クチンに来て約2ヶ月。マレーシアで友達のお店を手伝いながらのんびり生活しています。もともと日本で海外の方々を知り合う機会が多く、その中でもシブ出身の友達と出会ったことが良いきっかけになったのだと思います。シブでの3年間は、友達のお店に遊びに行き、日本の接客ってこんななんだよ〜ってのを教えたり、中華鍋の振り方を教えたり、基本的な和食の味付けを教えたり、その代わりに、福州語や中国語を覚えてもらうのですが、みんなで飲みについてワイワイしているとすぐに忘れて…、をひたすら繰り返しています(笑)。

とりあえず、勝手に決めますがシブはカンボア麵の町です。たまに日本に帰る時は、スーツケースの半分以上がお土産のカンボアで埋まったりします。とはいっても乾麺なのでやはり味はちと落ちますけどね。他にもユーミェン(太目の焼そばみたいなの)やらクィティオ(もちり平麺パスタみたいな)やら色々あって、どれもおいしいのですが…。自分的にはカンボアですね。日本でカンボアが入ってるからこそラーメンの麺だと感じるように、カンボア麵にも独特の味が入っていてやみつきになっています。

そうそう南国といえばドリアンですが、ドリアンにも色々な種類があるんですね。初めて知りました。そして、自分はビールをよく飲む方なのでみんなが口を揃えてドリアンとお酒はダメだよ!!って、毎年ドリアンの季節になると心配してくれます。まあアルコール度の高いお酒と大量のドリアンの組み合わせがダメなみたいなんですけどね。

そして、クチンですが、来て間もないのでまだ知らないことがいっぱいなのですが、一度友達に連れて行ってもらったバクテーのお

店はかなり良かったです。以前にもバクテーは食べたことがあったのですが、そこのお店は今までで一番自分にあつた味でした。困ったことに場所を覚えていないので…。只今、道を覚えるために日々ドライビングレッスンの毎日です(笑)。一つ、気づいたのですが、クチンには何箇所か、車線が左右逆になっている所があるんですよ。初めての時は正面から対向車が来たのでめちゃくちゃ焦りました。クチンにせよシブにせよ日本にいる時と比べると割とのんびり過ごせるので、移住してくる人が多いことになぜか。



カンボア麵



手作りチャーシュー

その上、日本人!? 日本国!? 日本の技術!? を高く評価してくれる人が多いので、地元の人達と話を始めると盛り上がり話話が途切れることがありません。地元の人達以外にもインドの方々を知り合う機会が多く、色々話していると、日本のことについてあまり知らない人が多いのですが、明るい人が多くてとても楽しいです。

基本料理はカレーパウダーとチ

リパウダーと香辛料で味付けしているの、たまに和食を作ってみて辛さが足りないよ〜! っていう意見が多いのですが、酢飯を作った時は、おいしいと言ってがっつり食べてくれました。まあ彼らのヒンディー英語は自分にとってはかなり難しくお互い通じてるかビミョーなところもあるのですが、それでもお互いひたすら喋り続けるのが海外生活での醍醐味だと思っています。

言語に関して、やはりマレーシアの方々には本当にすごいです。かなりの方々マレー語、中文、英語に加えてイバン語やら福州語やら福建語やら台湾語、日本語も一度、流暢な発音で日本人かと間違えるほどの方もいらっしゃいました。普段は、色んな言語ごちゃ混ぜでむりくり会話しようとしているのですが、それでもみんな理解してくれてるんですね。せいかく、語学レベルの高い国に来ているのだから、自分も精進せねばとつくづく感じさせられます。

最後にフェスティバル系です。自分のまわりは中華系マレーシア人の友達が多いので、最近1月1日を祝う方も増えてきたみたいですが、やはり旧正月が1番のメインイベントって感じます。町全体に、もやがかかっているんじゃないかってぐらいになるまで花火や爆竹を鳴らし続けます。友達同士で、お互いの家を訪問して回ります。初めての旧正月は1軒当たり30分から1時間程度なんですけど、5軒6軒とまわりました。実はこの時、飲みすぎてパスポートから何からどこいったか分からなくなったのですが、翌日、友達が家に置き忘れてたよ! って届けてくれました。本当に感謝です(笑)。そんな感じで約3年、もうすこし、マレーシア・サラワクでの生活を続けてみようと思っています。

サラワクの医療事情一川

中澤 和代

私が今、住んでいるサラワクの医療事情について書くのは、これで三度目。一度目は2006年1月に自分の怪我と入院体験から。二度目は2009年5月にサラワクの格差と貧しい人々への医療および福祉との連携を。一度目と二度目の間に2008年5月に村の医療と題して、開設前のムヒバを利用し、街のライオンズクラブと医師グループのコラボによる村人の健康診断を実施したことについて書いている。2016年1月の今回は二度目の執筆から約7年が経過している。あくまでも筆者個人の感覚によるものであるが、果たしてこの地の医療はどう変化したのか。

「ムヒバ」に通ってきているメンバーの医療ニーズに焦点をあてたいが、その前に全体を見てみると、街には州立病院の他に超高額のプライベートホスピタルが存在し、お金持ちや外国人が利用している。博士号を海外留学で取得した医師、テレビ、トイレ・シャワー付き個室、選択メニューが用意された食事。看護師たちもキビキビと働いている。通常、クリニックと表現する小さな医院も街にはたくさんある。今では、普段お付き合いのある女医さんが私たちのホームドクター。彼女についての印象は、その都度、様子を見ながら、投薬は最小限、注射は極力しないという方針で医療を進めていることである。

村人は、相変わらず伝統的な医療（おまじないや個人の夢見による薬）を好むが、同時に州立病院やクリニックへの利用度も高くなったと思う。以前なら死に至る前の数日を病院で過ごすだけだったことを思えば変化している。現在の私たちの村には、24時間、電気があり、テレビも視聴するから当然とも言える。

2013年、夫がワークキャンプの最終日の深夜、ロングハウスの裏で転倒して、肋骨を3本（4カ所）骨折した時、嫌がる夫をみんなで説得、約1時間の道程をヴァンで

走り、州立病院の救急を受け付けてもらった。明け方2時半を過ぎた頃、病院に到着したが、何人かの医師が診察、全身をレントゲン撮影後、損傷のあるのは肋骨だけと判明し、病院に付き添った一同は胸をなでおろした。ワークキャンプへの最後の朝食を用意するために妻の私が、入院したばかりの夫を病室に残し、ロングハウスに戻ることも、ここの医師は快く了解してくれた。入院中は、酸素の量を頻りに計測し、退院可能日への指標とするなど、近代的。

しかし、退院後、伝統は生きていた！イバン族の祈りを含む治療に週一で3回通うことを余儀なくされ、中国系の人からの進言により、胸回りに広幅の葉草シップ？を貼ること3週間。全て、周りの好意であるが、貼った箇所の湿疹（かゆみ）に耐えるのが大変。夫にとっては、これらも感謝と教訓の一助になったかも知れない。

さて、「ムヒバセンター」には歩けない人が5人いて、その中の3人は子どもである。最近では州立病院から医師、看護師、PT、OTが時々来てくれているので、大人は仕方がないとしても、骨の固まっている子どもには、まだ可能性を信じているし、期待がある。3人の子どもは、CPであるが、一人はすでに12歳の男子、車椅子使用のウイルソン。何ヶ月か親と共に他の地に行ってる間に動かない足がいつそう固まった。もう一人は歩行意欲がなく、歩く練習が嫌な11歳女子、ナターシャ。同じく車椅子利用。もう一人が努力家の9歳女子、ピアである。今の「ムヒバセンター」は、歩行バーを設置していて、毎日、ピアは、午前、午後と歩行練習をしている。その他の時間は這い這いなのだ。そこで私は、日本の厚生労働省が無償供与として、インターネットにアップしている補装具をいくつか印刷しPTに見せた。「こういうものを使えないでしょうか？」PTは、いくつかの写真から一つを指し「彼女

にはこれがいいと思うけど、ここ(Sibu)ではみんな使わないから手に入れるのは難しいかも？」と言いつつ、装具を販売している店を教えてくれた。早速、店を訪ねたがやはりマレーシアにはないとのことである。夫は11月に帰国する私に日本でそれを買えないだろうか…と。ピアが自由にムヒバ内を歩けるようになったらもっと可能性が広がる。チャンスは今だ！

全日程10日間の帰国中でそれを探するのは大変かと思いきや、何と日本ではいとも簡単にインターネット注文可能だった。12月はじめピアの身長や体に合わせた歩行器（約4kg）を国際郵便（EMS）で配送依頼後、マレーシアに戻った。

そして、12月14日、Poslajuから連絡があり、早速、夫が歩行器を受け取ってきた。事情を説明したら、関税は免除してくれたとのこと。話のわかる素敵な役人だ。ピアが自由に動く姿を見るのが待ち遠しい！これを「サラワク&日本のコラボ医療」と勝手に名付けよう。夫は次に向かって日本製小児整形靴（外反足）を研究模索中。



熱心に歩行訓練をするピアちゃん



お姉ちゃんたちと比べるとこんなに小さいからこそ可能性いっぱい！！

ACSはいま

khon Ai-Na

住み込みアーティスト募集 (ACS・ステッピングストーン)



ACSステッピングストーン・ワークセンターは、ペナン島パリックブラウの西南地区ブラウベトンという漁村にあります。ブラウベトンは、バスでジョージタウンからは90分、空港からは30分の距離にあります。貸し自転車とバスでペナン島の何処に行くのも可能です。ワークセンターは知的障害者達のために自然に優しい家内工業の環境を提供し以下のような地元の伝統芸術品を制作しています。

- パティックの染付 (ろうけつ染め)
- 織物 ●紙作り (植物繊維を使用) ●石鹸作り (使用済みサラダ油を使用) ●陶器

住み込みアーティスト(AiR)

プログラムの概要:本プログラムにおいて、アーティスト達は上記の活動を知的障害者と共に行うだけではなく、食事などの生活面でも地元文化に浸っていただくこととなります。アーティスト達はセンターにある材料を使って自由に

作品を作りながら、ワークセンターにいる個々の知的障害者メンバーの能力を見つけ、育てることを期待されています。プログラムの最終成果として、アーティスト達とステッピングストーンのメンバーの共同作品展覧会を行います。

住み込み期間:2~6ヶ月(交渉可能)
候補者の条件:有名無名、国内外を問いません。障害者との個人的接触や協働経験があれば有利です。異文化に柔軟に対応できる方を求めます。作業場での言語は、英語とマレー語ですが、視覚的な表現やその他のコミュニケーション手段も必要となります。アーティストは地元文化に慣れるよう、主催者側より随時精神的な支援を受けることができます。**後援:**旅費、食事、ビザ、保険などは自己負担・自己責任となります。住居と作品製作の材料の一部はプログラム主催者より提供されます。

住居:ACSワークセンターの隣のゲストハウスの個室が提供されます(食事なし)。共同バスルーム、洗濯機、台所、インターネット、テレビの利用が可能です。**公共展示会:**本プログラムの最終段階ではセンターのメンバーとの共同芸術作品の展示会を行います。ステッピングストーンのメンバーの作品及びアーティストとの共同作品は主催団体が所有権を有します。個人作品あるいは共同作品が展示会の最中に購買される際、ACSステッピングストーンは手数料を課します。共同作品の販売利益は、製作者と主催団体との間で適宜分割されます。**応募方法:**件名・AiR Applicationでcaasperang@gmail.comまでメールをお送りください。**●履歴書 ●最近作成した美術作品の写真5~6枚(5MB以下) ●応募理由 ●本プログラムに参加できる時期と期間をmail内容または添付すること。**



RCSはいま

中澤 健

☆☆☆ここ最近を振り返りつつ☆☆☆

9月は、ワークキャンプで始まった。1週間後、「ムヒバ」は新築みたいに綺麗になった。気を良くして、その後も外作業の日はペンキ塗りが続いた。お陰で、建物内外、守衛小屋も宿舍も山上の小屋も綺麗になり、門裏側の絵や入り口小屋の絵も描き換えられた。全て終わって気がつくとも10月に入っていた。

10月と11月は、福祉局主催の行事が多かった。イベントには消極的な私は、日常活動が大事と言いながら、参加するなら準備をと、ミーティングで計画を練った。福祉局からは、計画性がないというか、思いついたようにあれこれ言

ってくる。しかも福祉局行事は大抵が土日。いわば、休日出勤である。いろんな行事がほぼ休みなく1ヶ月続き、全員ではないがメンバーもスタッフも疲れた。休日給とか代休とかの声は誰からも聞かれなかったが、11月始めに2日間「ムヒバ」を臨時閉鎖して、その週の土日と合わせて休日とした。この4日の休みは有効だった。休日明け皆の顔が再会に輝いていた。

良いことばかりではない。9月29日には送迎のヴァンが事故に遭った。パーム椰子満載のローリーがヴァンの横腹に衝突。幸い誰も傷つくことなく、修理は1ヶ月半近くを要したが、支払いはローリー



水泳まかせといて！の4人

側負担で解決。12月8日、大工事をした道路の一部が再び一部崩落。それだけ雨が激しいのだが、これも、12月18日までに自分たちの手で応急補修をすませた。一喜一憂の日々。メンバーもスタッフも益々絆が深まる。ニコニコ顔で新しい年が迎えらるることを感謝！

じらんじらん ちやり がやん♪(35回)

海の中のクリスマスツリー イバラカンザシ 上杉 誠

海を泳いでいると、写真のように岩のようなサンゴの上に色とりどりの花が咲いているように見えるときがあります。なんだろう？と思って近づいていくと、その花はぱっと消えてしまいます。いったいこれは何なのでしょう…。

実はこれ、イバラカンザシというゴカイの仲間なのです。ゴカイというと、釣りの餌に良く使われる気持ち悪いムカデのような、足の生えたミミズのようなあの生き物のことです。それがこんなに綺麗だなんて。ゴカイの仲間にもいろいろあって、気持ちの悪いゴカイは砂の中に潜って砂の中のごみを食べているタイプ。砂をもものすごく綺麗にしてくれる海の掃除屋さんでもあるのです。そして、イバラカンザシのように巣穴の中からエラを出して、水中に漂ってくるプランクトンやごみを濾し取っ

て食べるタイプがあるのです。

このエラは細かいものを濾し取りやすいようにブラシ状になっていて、上手い具合に餌になるものを絡め取る事が出来るようになっています。もちろん呼吸をするためにも大切な体の一部。他の生き物に襲われて無くなってしまっただけで済むので、イバラカンザシは水流や影を感じて、敵が来たかと判断するとパッと一瞬でそのエラを隠してしまうのです。

このタイプの多くの種類は傘状に一層だけ開いているものが多いのですが、イバラカンザシの場合は多層構造になっていてまるで小さな杉の木みたいに見えます。そして同じ種類ながらもそれぞれ色が違って、赤、オレンジ、黄色、緑、青、白、茶色にそれぞれが混じった斑模様と実に鮮やかな色をしているのです。



きれいなイバラカンザシ

そう、これはまるで艶やかに飾られたクリスマスツリーみたいなんです。近づいてみるとパッと消えてはまた現れる様子もなんだかイルミネーションみたい。海の中にもクリスマスツリーがあるなんてなんだかロマンチックですね。

この原稿を書いている今は、もうすぐクリスマスの時期です。今年には世界各地で悲しい様々な出来事が重なった年でした。来年は平和で穏やかな年になってほしいものです。

Merry X'mas & Happy New Year!!

jalan jalan cari kawan はマレー語で友達を探しに行こうの意味です。

平成28年度ACE総会のお知らせ

日時：平成28年6月11日（土）午後1時30分～7時

場所：TKP市ヶ谷カンファレンスセンター（昨年と同じ場所）

講演 村木厚子さん（前厚生労働省事務次官） 改めて、3月中に「ACEだより」で予告します。

ACEに入会のお誘い

*この会(ACE)は…?

アジア地域福祉と交流の会 (ACE)は、人種、宗教、性別、障害の有無などにとらわれず、「お互いの違いを認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障害児(者)の福祉活動をしているベナンのACSとサラワクのRCSの活動を支援しています。

*賛助会員種別と年会費

一般会員 (1万円)	特別会員 (3万円)
学生会員 (5千円)	団体会員 (5万円)
終身会員 (納入1回限り 15万円)	
任意会費会員 (年会費2000円以上)	

*ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFaxか郵便で事務局にご連絡ください。アドレス、URL、Fax番号は、1ページ紙名の下にあります。

編 集 後 記

・超特急のように走り去る1年。今年もあと10日あまりで終わりです。今年の十大ニュースは？と毎年、1年を振り返る我が家。健康で活動に携わることができていることを感謝とともに嬉しいニュースに加えたいと思います。心配なこと、気持ちが暗くなることは内外ともに多いけれど、やはり、来年も身近に笑顔がある日常をつくって行こうと考えています。(Kazuyo)

・2015年、世界も日本も心穏やかではない日々が多かった気がする。紛争、テロ、日本が向かう先など、見渡すと暗澹たる気持ちになる。が、高齢者こそ希望を見出さねば、次世代、次々世代への責任が果たせない、自然と親しみ、笑顔で暮らすポルネオの人々の逞しさに学びながら、武器による解決とは違う道を探り続けたいと思う。弱いもの、目立たないものこそ大切にする、新しい年となりますように！(Ken)